

医療ルネサンス

No.5796

シリーズ
薬

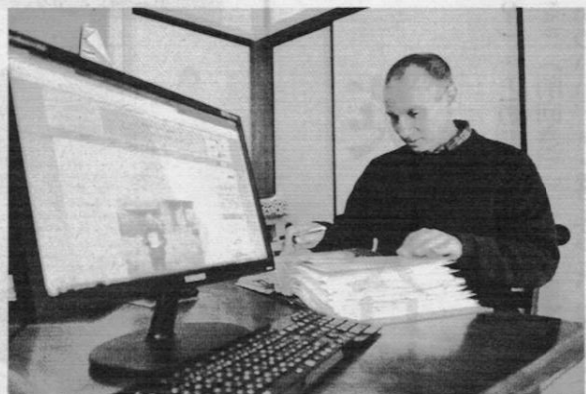
危険な処方

3/4

安易な継続で依存症状

先月下旬、抗不安薬と睡眠薬の多くを占めるベンゾジアゼピン系薬剤の有害性や減薬法を紹介するインターネットサイト「Benzo Case Japan」が開設された。ニュージーランド人のウェイン・ダグラスさん(47)が、英国人医師らの協力で日本語版と英語版を完成させた。ダグラスさんは日本文化に興味を持ち、25歳で初来日した。全国各地の自治体で働き、国際交流の担当や英語講師などを務めた。2000年5月、突然の激しいめまいに襲われ、東京の耳鼻科医院を受診した。医師は「薬で体質を変える」と、ベンゾジアゼピン系薬剤を3種類処方した。これらは精神科で多く処方されるが、筋肉の緊張を和らげる作用や鎮静作用などを期待し、一般診療科でも安易に処方されやすい。

*Benzo Case Japan
http://www.benzo-case-japan.com



インターネットサイトの作成に力を入れたウェイン・ダグラスさん(長野県の自宅)

決まった量でも長く飲むと不安感などが強まる依存症に陥る恐れがある。耐性ができて薬の効果がなくなり、断薬した時と同じような離脱症状が表れるためだ。だが医師は「少量では依存性はなく副作用もほとんどない」と説明した。

その後、症状は悪化。恐怖や不安に突然襲われるパニック発作など、以前はなかった症状も表れた。同年11月に断薬を試みたが、パニック発作が頻繁に起き、耐えられず薬を再開した。ニュージーランドに戻り、薬物依存症の専門病院でベンゾジアゼピンの依存症と診断された。通院し、薬を少しずつ減らした。それでも、離脱症状の抑うつや強い不安感が断薬後も続き、主治医が復職許可を出すまでに約1年かかった。

「科学的根拠のない処方」で大きな不利益を被った。ダグラスさんは07年、民事

訴訟を起こした。医師側は依存症を否定し、もともと自律神経失調症だと反論。ニュージーランドの主治医は「症状の経過をみると、明らかに依存症だ」と主張したが受け入れられず、11年、高裁でも敗訴した。

だが「日本の状況を変えたい」との思いは強まった。東日本大震災の時は福島県内の国際交流施設で仕事をしていた被災したが、日本にとどまった。避難先で英語講師のアルバイトをしながら、12年にはベンゾジアゼピン系薬剤の減薬手引「アシュトンマニュアル」の日本語版を翻訳者のひとりとして完成させた。「おかげで断薬できた」との感謝の声が次々と届く。

ダグラスさんは「医師も裁判所も頼れない日本では、正しい情報で社会を変えられない。欧米の著名な医師たちも日本を問題視しており、力を借りて患者のネット調査などを行いたい」と意欲を見せている。